あゆみ速報
原研労組中執ニュース
No.4658(58-21)
2006.12.08(金)

原子力和利用三原則ー公開・民主・自主ーを守ろう
日本原子力研究開発機構労働組合
〒319-1106　茨城県那珂郡東海村白方白根2-4　Tel. 029 (282) 5413, 5414　Fax. 029 (284) 0568

回覧				

本日（12 月 8 日）12 期一時金も一方支給
(12 月 1 日)拡大窓口交渉、団体交渉 ともに決裂

12 月 1 日、原研労組は、1 時間の時限ストライキを行いました。

結局、機構は[この 1 年余、旧原研部分だけが切り下げられ、不公平だ]という声に、納得できる返答はしませんでした。

12 月期一時金の運動は、6 月期一時金の反省を踏まえ、ストライキを配置しての運動としました。はじめから労組の要求を明確にし、一定の前進がなければ、ストライキを実施するという姿勢を示して交渉に入りました。労組の姿勢が本気だとわかると機構は、いろいろ言ってきましたが、ストライキを回避できる前進はなかったため、ストライキを決行しました。

ストライキの配置も含めた運動でできたこと：

① 統合後の旧 2 法人への扱いが、**全く不公平**なものであることを、非組合員も含めた職員に明らかにした。

② **労組は、統合後、「旧原研部分だけが切り下げられている」と不満を述べてきたが、それだけではなく、昨年の 12 月期一時金では、旧サイクルの部分には一昨年よりも約 6%増額するというお手盛りをしていたことがわかった。**

③ 労組の「旧サイクル機構職員も含め、1 から 5 級には一時金査定を入れるな」という要求に対して、機構は**「今回はできないが、次の 6 月期一時金では、労組の主張を検討する」**と言わせた。

④ 旧サイクル機構で行なわれてきた、人事評価制度について、少しずつ話させた。しかし、機構の態度は、級ごとの査定額や A,B,C の分布などを言わないなど、率直なものではなく、更なる追及が必要である。

今後の課題：

明らかになった不公平を拡大させず回復に取り組むこと、今後焦点となる新人事評価制度について、われわれが気持ちよく働ける制度を作らせるなどが求められます。しかし、考え方の違い以上に、機構の態度は率直さをかいており、今後の運動ではその点も注意しなければなりません。

機構が一方支給する 12 月期期末手当の支給内容は次のとおりです。

【1 から 5 級及び 6 級総括主査】

(本給×2.535　＋　6,500 円×F　＋　66,637 円※＋職務別加算）×期間率

F は機構規程による扶養家族数、

職務別加算は、（本給＋特別都市手当）×2.535×加算率（4,5 級：0.05、6 級：0.1）

＊旧サイクル機構職員の場合、定額項は人事評価査定により変わります。

プラス額は最高約 2 万円、マイナスは最悪約 4 万 8 千円だそうです。

額は級により異なります。

労組の要求にも関わらず、機構は級ごとの査定の額を示しません。旧サイクル機構で行なわれていた査定の入れ方と、6 月期一時金の経緯などから推定すると、C 評価にされた場合、5 級でマイナス約 4 万 8 千円、級が下がるごとに順次マイナス額が減り、1 級でマイナス 2 万 4,5 千円と推定されます。査定のランクは 1 年単位で付けられるため、6 月期でマイナス査定された人は、今回の 12 月期でもマイナス査定になります。

＊旧原研職員は変わりません。

【 副主任研究員、課長代理（6 級)】

{(本給＋職責手当）×2.634×査定結果＋職務別加算}　×期間率

ただし、査定結果： A=1.10、B=1.05、C=1.00、D=0.95、E=0.90

職責手当： 課長代理については、12 月 1 日現在支給されている調整給を含む職責手当、副主任研究員については、同じ号給の課長代理の職責手当（本給額の 15%(100 円未満切り捨て)）に読み替えた額

【 臨時用員 】

- 昨年と同じです。-

平成 18 年 6 月 2 日から平成 18 年 12 月 1 日までの期間において、

(1)	20 日以上 40 日未満の出勤者	本給日額の 12 日分
(2)	40 日以上 70 日未満の出勤者	本給日額の 23 日分
(3)	70 日以上 100 日未満の出勤者	本給日額の 29 日分
(4)	100 日以上の出勤者	本給日額の 32 日分

注)　臨時用員就業規則に定める年次休暇及び特別休暇は、出勤とみなす。

期間率などの詳細について、疑問の方は組合事務所又はお近くの執行委員にお問い合わせください。

「戦場で心が壊れて」を読んで　　（投稿：S.T）

最近、アレン・ネルソンというアメリカ人が書いた「戦場で心が壊れて」という本を読んだ。ネルソン氏は、元アメリカ海兵隊員で、19 歳の 1966 年夏から約 13 カ月間ベトナム戦争に投入された。1970 年に除隊した氏は、その後、長い間 PTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しめられる。PTSD とは、強い精神的ショックを受けるできごとを体験して大きなストレスにさらされた人が発症する、心の病気である。当時、PTSD を知る人は少なかった。「私はベトナムのジャングルで、何人もの人を殺し、家を焼き払いました」ネルソン氏は言う。「殺した人たちの中には、敵の兵士だけでなく、女性も子供も老人もいました」何かの折りに、たとえば、独立記念日の花火の音を聞いたり、ドブネズミの死骸のにおいを嗅いだり、身の回りを飛ぶハエを見たりしたときに、不意に、鉄砲の音や死体のにおい、死体に群がるハエなど、戦場で体験した光景が目の前にフラッシュバックされ、そのたびに氏を苦しめる。そんな氏の様子は、他の多くのベトナム帰還兵と同様、家族や隣人たちから理解されず、逆に怖がられたり白い目で見られたりする。気味悪がる母親から家を出て行くように言われ、氏はやむなくホームレスの生活を始める。

そんなとき、自ら望んだ訳ではなく、ある偶然から、貧しい家の子が多くいる小学校で、４年生の子供たちに自分の体験を語る機会が訪れる。戦争についての一般的な話の後、一人の女の子から、「ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？」と訊かれ、しばし絶句する氏。その場から黙って立ち去るべきか、「イエス」と答えるべきか、氏の中では葛藤が激しく渦巻き、やがて、呟くように「イエス」と――。質問した女の子が、抱きしめるようにネルソン氏の腰に手をまわし、涙を浮かべながら、「かわいそうなネルソンさん」他の子供たちも次々と氏を抱きしめようと、涙を流しながら寄ってきて・・・。そのとき、氏の目からも涙があふれ・・・。

このことがきっかけとなり、氏は PTSD を本格的に治そうと決意する。病院に通うにはお金が要るため、いろいろ働きながら治療を受け続け、高校卒業の資格を取り、大学も卒業する。７年もの薬漬けの治療の後、別の州に引っ越したのを機に、PTSD を専門とする D 医師と出会った氏は、定期的にカウンセリングを受ける。そこで、ベトナム戦争以前にも、戦争による PTSD 患者が発生していたことを知る。一対一のカウンセリングのとき、D 医師はじっくりと話をきいてくれ、決まって最後に質問する。「ネルソンさん、あなたはなぜ人々を殺したのですか」「戦争だったから」「上官の命令に従ったから」「海兵隊で人を殺す訓練を受けたから」「敵に殺されそうだったから」「自分が生き延びるため」「敵は悪い共産主義者だといわれたから」ネルソン氏は、D 医師から訊かれるたびにいろいろ答える。すると、D 医師は、「わかりました。また来週」といって、その日のカウンセリングは終わる。

D 医師のカウンセリング治療を受け始めてから９年ほどがすぎたある日、いきなりカウンセリングの冒頭で D 医師から訊ねられる。「ネルソンさん、あなたはなぜ人々を殺したのですか」その質問に対する答えは既に出尽くしており、もはや答えるべき理由が見つからない氏の口から出たのは、「殺したかったからです」それは氏が最も口にしたくなかった言葉である。人々を殺したのは、殺したかったから――そのことを認めたくなくて、氏は言い訳に、人々を殺した理由をいろいろ探していたのだ。「私はベトナム行きを拒否することもできたのです。そのために軍法会議にかけられ、罰せられたかも知れませんが、人を殺さずにすんだはずです」ネルソン氏は言う。「でも、私は戦場行きを選択しました。兵士が戦場に赴くとき、そこにはある『したいこと』があります。それは自分の暴力性の解放、つまり人を殺すことです」

「ネルソンさん、よく気がつきましたね、あなた自身の本当の気持ちに」D 医師がネルソン氏から引き出したかったのは、その言葉だったのだ。「これからは、自分がしたことを忘れずに、勇気をもってそれと一緒に生きていくのです」

その後も、カウンセリングは続けられ、「でも、ネルソンさんに『人を殺してもいい』と思わせた何かがあったはずですね。それは何だったのでしょう」医師とともに考えた氏は、自分の生い立ちや育った環境の影響が非常に大きかったのではないかと思い至る。NY のゲットーという貧しい地域に未婚の子として生まれたこと。貧しさと差別によって人々の心は荒み、地域には憎しみや暴力がいつも満ちていて、けんかや争いごと、犯罪は日常茶飯事だったこと。６歳の頃、母親が海軍兵士の男と結婚し、DV（夫婦間内暴力）が繰り返されたこと。そうした中で、氏自身も暴力的になっていき、毎日毎日、学校や街中でけんかをし、けんかは、暴力はいいものだと思ったこと、などなど。

一方、氏が受けた教育には、様々な形で暴力肯定の内容が含まれていた。小学校で習った、白人が先住民を攻撃してその土地を奪った上にアメリカができたという建国の歴史。第２次世界大戦のとき、日本の広島と長崎に落とされた原子爆弾は、戦争終結を早める役割を果たしたということも、教科書に書かれていた。また、国のために戦争に行くのは英雄的な行為であるとも教えられ、たとえば、アメリカが第２次世界大戦に勝利し、ヨーロッパをナチスから解放し、民主主義をもたらしてきたという歴史は、たびたび強調された。高校を中退後、勧誘されて入った海兵隊では、隊員の目的は「殺すこと」だという観念を植え付けられ、どうやったら人を殺せるのかという実践訓練が毎日徹底して行われた。軍隊という組織では、そういうことに疑問をもつこと、そもそも自分の頭で物事を考えることは許されなかった。こうした体験を経て、氏は戦場に行き、殺戮をはたらき、精神を病むようになったのだった。　どんなに人を殺しても、とがめられることがない、捕まることがない――普通ならあり得ないことが、兵士なら、戦争なら許されてしまうのか。自分のような人間を増やしてはならない。氏がはっきりとそう思ったのは、最初の治療を開始してから 20 年近くがたった頃だった。

やがて、氏は反戦運動、非暴力の活動に関わるようになり、子供たちや人々に自分の体験、戦争の真実の姿を語り始める。氏は、1995 年に起きた「沖縄駐留米兵 3 人による 12 歳少女のレイプ事件」をきっかけに、1996 年、ちょうど 30 年前に自らが海兵隊員として駐留していた沖縄を訪れ、ベトナム戦争の話をする。さらに、日本の本土でも講演をするようになるが、何かがおかしい、何かがきちんと機能していないような違和感を覚える。氏は言う。「それは、小学生から大学生に至るまで、日本の子供たち、若者たちに、第２次世界大戦についての知識が極端に乏しいということです。歴史を学んでいるはずなのに、韓国併合、植民地支配、南京事件、中国での人体実験、『慰安婦』など、何の情報も与えられていない、教えられていないのです。また、日本の多くの政治家が、過去の侵略の歴史に対し、一般的には反省を口にするものの、具体的な出来事については、否定したり言い訳したりする人が非常に多いのに驚きました」ネルソン氏は言う。「私には、日本という国もまた、ある意味で私と同じような病を抱えているように見えます。なぜなら、PTSD にかかると、戦争のことを語れなくなります。でも、実は、戦争のことをいつも考えているのです。日本政府の閣僚の頭の中には、常に第２次世界大戦のことがあると思います。中国や韓国、朝鮮などの国々との間で、歴史認識のことがいつも問題になりますから。普通の人々の中にも、それについて考える人は少なくないでしょう。何しろ、何百万人もの日本人が命を落とした戦争です。忘れてしまえる訳がないのです。ところが、そうであるにもかかわらず、第２次世界大戦についての言葉が、この国から聞こえてくることがあまりにも少なかったし、特に、日本が中国や韓国、フィリピンやマレーシア、ベトナムなどの国々を侵略したということについて、はっきりとそれを認めたり反省したりする言葉が非常に少ないと感じました」

氏は、2005 年にベトナムを訪れ、集会に集まった人々の前で、ベトナム戦争で自らがしたことを正直に話し、きちんと謝罪した。